

博士学位論文審査の結果の要旨および担当者

| | |
|------|---------|
| 報告番号 | ※ 第 8 号 |
|------|---------|

氏 名 ソロンガ

論文題目

中国における「伝統」の継承、「再創造」、「移植」
—内モンゴル自治区における「白いスウルデ」祭祀をめぐって—

論文審査担当者

| | | | |
|-----|--------|-----|------|
| 主 査 | 愛知県立大学 | 教授 | 稲村哲也 |
| | 愛知県立大学 | 教授 | 杉山三郎 |
| | 愛知県立大学 | 准教授 | 亀井伸孝 |
| | 関西学院大学 | 教授 | 古川 彰 |

学位論文の内容の要旨

本論文はモンゴル帝国支配者チンキス・ハーンの象徴ともいえるべき「白いスウルデ」を祀る3つの祭祀の生成、継承の過程とその正統性の主張の比較を通して、伝統文化とエスニシティおよび政治権力の相互連関を明らかにしたものである。

「白いスウルデ」とは、紋章と幡を組み合わせたような形態をもち、モンゴル帝国の「国旗」に当たるようなものであった。『モンゴル秘史』に、1206年テムジンがオノン河のほとりで「白いスウルデ」をたてて大ハーンの位につき、チンキス・ハーンの称号を与えられたとの記述があり、その祭祀は、モンゴル帝国崩壊後も、モンゴル軍の兵士の直系一族、チャハル部モンゴル民族にあたる祭祀集団によって、内モンゴル自治区オルドス市ウーシン旗において、現在まで代々受け継がれてきた。社会主義中国の建国当時から文化大革命が終わるまで、「白いスウルデ」祭祀は30年にわたって中断した。文化大革命の嵐が過ぎたあとの「改革開放」政策によって、イデオロギー的締め付けが緩んできた1982年頃、その祭祀が再開された。しかし、盛大に行われたのではなく、むしろ密かに行われてきた。

ところが、2006年のモンゴル統一800周年の機に、オルドス市ウーシン旗の他の場所で、この伝統的な「白いスウルデ」儀礼とは別に、民俗研究者らによる「古文書の発見」をきっかけに、オルドス部モンゴル民族の観光開発業者による投資によって「白いスウルデ」祭祀が大々的に「復興」され、盛大に開催されるようになった。

さらに、2008年7月から、オルドス市から遠く離れたところ、かつてのモンゴル帝国の都であった元上都の遺跡があるシリンゴル盟シュルンフフ旗でも、世界遺産登録申請に向けて「伝統文化」の復興を推進してきた地方政府の役人（チャハル部・モンゴル民族）のイニシアティブによって、「白いスウルデ」祭祀が執り行われるようになった。こうして、内モンゴル自治区で、モンゴル帝国の象徴「白いスウルデ」を祀る祭祀が、それぞれの正統性を主張しながら、三か所で並行して行われることになった。

著者は、2006年8月から2012年3月にかけて11回、計11ヶ月の現地調査を実施し、祭祀の観察、関係者へのインタビューを行い、歴史と伝承については文献を詳細に参照し、3つの祭祀の規模と内容、由来、担い手と参加者のエスニシティ、三者の相互の影響、政治権力との関係等について論じ、この3つの祭祀を、それぞれの由来や特徴に基づいて、「伝統祭祀」、「再創造祭祀」、「移植祭祀」と名付けて比較した。

①「伝統祭祀」は、オルドス市ウーシン旗のほぼ農耕化されたソム（郡）の中で、わずかに牧畜を営んでいる地域で行われている。98%以上を占める漢族の住民に囲まれながら、モンゴル帝国軍の直系の祭祀集団が細々と祭祀を守り続けてきた。これは、文化大革命で一時中断したが、以後はその子孫が再開し、モンゴル帝国由来の祭祀がまがりなりに継承されてきた。その主体となってきた祭祀集団は、その地域に居住する主要なモンゴル民族であるオルドス部モンゴルとは異なる集団のチャハル部モンゴルである。モンゴル帝国の象徴を意味した「スウルデ」を祀る祭祀は、帝国崩壊後に漢民族の中で祭祀を継続するため、祖先祭祀に変化した。この祭祀の正統性として、祖先からの継承が主張されている。参加者は数百人でチャハル部モンゴルに限定されている。

②「再創造祭祀」は、モンゴル帝国統一800周年を機に、「復活」した新祭祀である。「伝統祭祀」と同じくウーシン旗で、直線距離にして50キロとい近い場所で開催されている。地域に居住する主要なモンゴル民族であるオルドス部・モンゴルが担い手である。この祭祀の正統性として古文書の発見が主張されているが、その古文書の現物は明らかにされていない。祭祀の対象は、モンゴル民族の神である「テンゲル（天）」とされている。この祭祀が開催される場所は、「白いスウルデ」生態観光区として開発され、祭祀参加者は雇われて大々的なイベントとして行われ、数万人の観光客が入場料を払って参加する。「伝統祭祀」の祭祀集団からは協力を拒否され、研究者らからもその正統性が疑われているが、一方で多くのモンゴル民族にとって、この祭祀は正統なものともみなされ、モンゴル民族のエスニシティの活性化につながっている。さらに、この祭祀がメディアに取りあげ

られるようになると、「伝統祭祀」への関心も高まりメディアに取りあげられるようになった。そのため、祭祀場が整備されるなど、「伝統祭祀」に影響を及ぼしている。

③「移植祭祀」はモンゴル帝国の古都の世界遺産登録を目的に「伝統祭祀」を「移植」した新たな祭祀である。これは、シリングル盟シュルンフフ旗の元上都遺跡の前で行われるようになった。この祭祀の担い手はチャハル部モンゴルである。この祭祀の正統性として、元上都で、モンゴル帝国のハーン直属のチャハル部モンゴルが主体となって執行していることがあげられる。この祭祀の「移植」には、地方政府のチャハル部モンゴルの役人がアクターとして活躍した。「伝統祭祀」の祭祀集団も、この儀礼の「移植」に協力した。そのため、祭祀の規模や内容も、「伝統祭祀」のものを受け継いでいる。多くの見学者が参加しているが、祭祀儀礼そのものはまだ定着の過程にある。

著者は、このように、「伝統祭祀」が連綿と受け継がれたにもかかわらず、新たに同じ「祭祀」が大々的に「再創造」され、さらには、過去の帝国の都に「移植」されて再編されていくという三重の構図に着目し、その背景を詳細に記述し、分析している。

その背景の一つとして、国を挙げて実施する「西部大開発」プロジェクトがあげられる。少数民族が多い内陸地域の産業として、環境汚染を引き起こさない無煙産業としての観光開発が重視され、その文化資本として「白いスウルデ」の「ブランド価値」が注目されたためである。これは世界で起こっているニュー・エスニシティ現象（エスニシティの復興・活性化）の共通のメカニズムとして理解できる。つまり、経済的な利益が、エスニシティの復興・再編のきっかけになり、その結果として、原初的な愛着としてのエスニック・アイデンティティの活性化が起こる、といった現象である。

しかし、中国におけるエスニシティの復興・再編の過程はより複雑である。中央政府はもちろん、地方政府でも漢族がトップを占め、実権を握っている。エスニシティは、国の政策と地方政府の政策に左右される。政治的には、マジョリティである漢民族とマイノリティであるモンゴル民族の関係に注目する必要がある。また、内モンゴルにおいては、モンゴル民族はいくつかのサブ・グループにわかれており、その間の関係にも注目しなければならない。三重の「白いスウルデ」祭祀には、オルドス部、チャハル部というモンゴル民族の内部のアイデンティティの重層性ともかかわっているからである。

二つの新たな祭祀の成立には、漢族が多数派を占める内モンゴル自治区においてマイノリティの立場にあるモンゴル民族と地方政府との間の関係が重要である。「再創造祭祀」は、西部大開発政策のなかでの観光開発の政策のもとで、地方政府の支持を得て大々的に開始された。また、「移植祭祀」の実現のためには、世界遺産登録を契機として、地方政府のなかのチャハル部モンゴルの中位の役人が漢民族のトップを説得して主導した。

「伝統祭祀」と「移植祭祀」は、大ハーン直属のチャハル部の子孫が担っているという点で共通の正統性を主張している。一方、「再創造祭祀」の担い手であるオルドス部モンゴル人たちは、観光開発と地方政府の支持を背景に、モンゴル民族全体の祭祀の継承として大々的な文化の再編を成功させた。それが、結果的には、モンゴル民族のエスニシティの活性化に役立っている。

しかし、中央政府にとって、伝統文化再生とエスニシティの問題は両義的なものにならないを得ない。一面では、観光資源として役立ち、少数民族文化の保護の姿勢をアピールできるが、反面、伝統文化とエスニシティの強調は統一を阻害する恐れがある。したがって、祭祀主体は政府との緊張を測りながら、事業を展開しなければならない。社会主義体制下における市場経済化、グローバル化という矛盾を内包した中国社会では、政策の揺らぎは必然的なものであり、祭祀の復興とエスニシティもそれに応じて揺らぐことになる。

学位論文の審査の要旨

■ 評価

「白いスウルデ」の伝統祭祀の形態とその由来に関しては、すでに、楊海英による詳細な先行研究があるが、著者が「再創造祭祀」「移植祭祀」と呼ぶ、2006年以後に始まった2つの祭祀に関する報告・研究は、このソロンガ氏によるものが唯一である。同氏は、フィールドワークによって、その開始直後から両祭祀を観察し、その由来、形成過程をつぶさに紹介しており、まず事例研究としての価値が非常に大きいと評価できる。

同一の祭祀が、中国内モンゴル独自の歴史的社会的背景の中で、複雑なエスニック関係の中で起こった三重の祭祀復活という現象自体が非常に興味深い研究対象であるが、著者は、文献資料と現地調査における祭祀主体者等へのインタビューによって、3つの祭祀を比較検討し、それぞれの祭祀の規模と儀礼手順、復興のきっかけ、主体者の立場、特徴、正統性の主張、祭祀の由来や生成発展過程、祭祀対象とその目的、担い手と参加者のエスニシティ、地方政府との関係などを詳細に記述している。モンゴル帝国時代に由来する複雑なモンゴル民族の内部のエスニック関係などは、自らがモンゴル民族である利点を活かしており、内部からの視点をもつ著者ならではのものである。一方、正統性の主張、地方政府との関係など、外部からの視点ももち、バランスのとれた分析となっている。

二つの新たな祭祀の復興現象の背景として西部大開発に焦点をあてて、興味深い分析を行っている。復興のきっかけとして観光開発と世界遺産登録が対比されている点、祭祀主体としてオルドス部モンゴル人とチャハル部モンゴル人とが対比される点など、エスニシティの再編における二重性は、従来の研究にはない課題を提示している。「伝統祭祀」との関係も、前者には拒絶、後者には協力として対比される。またメディアの役割にも着目し、3つの祭祀の生成・発展における相互の影響についても面白い分析を加えている。結果としては、新たな祭祀がモンゴル民族全体のエスニシティの活性化に寄与していると分析される。新たな祭祀の復興とその拡大は、どちらの場合も、地方政府による支持を背景にしているが、一方で祭祀主体者と地方政府の微妙な関係が具体的に記述され、中国独自の政治権力とエスニシティの関係もしっかりと分析されている。

本研究は、エスニシティ研究における新たな重要な事例を提示しており、考察でも中国固有の課題をしっかり分析しており、この分野の研究に貢献するものとして十分に評価することができる。

■ 課題

論文の冒頭から、結論を先取りするように3タイプの祭祀を「伝統」「再創造」「移植」として挙げており、論理構成としては必ずしも適切とはいえない。

文化人類学的な理論的考察という点に関しては、エスニシティ論の先端的な議論に充分寄与できる素材であるが、理論的な組み立てが十分にできているとは必ずしも言えない。先行研究における広範なエスニシティ論を踏まえたうえで、国家/マジョリティ/マイノリティ、エスニック・グループ/サブ・グループ、「伝統」/「創造」、アイデンティティ/経済・観光、ポリティカルエコノミー/モラル・エコノミーなどの枠組みを明確に踏まえた上で、論点をさらに整理して欲しい。それは今後の課題として残されている。

しかし、本論文の審査の結果、全体としては、ソロンガ氏の研究が課程博士号授与に十二分に値する成果を挙げていることを確認するものである。

最終試験の結果の要旨および担当者

| 報告番号 | ※ 第 8 号 | 氏 名 | ソロンガ |
|---|---------|------------|------|
| 試験担当者 | | 愛知県立大学 教授 | 稲村哲也 |
| | | 愛知県立大学 教授 | 杉山三郎 |
| | | 愛知県立大学 准教授 | 亀井伸孝 |
| | | 関西学院大学 教授 | 古川 彰 |
| <p>(試験結果の要旨)</p> <p>本学学位規程第9、10条にもとづき、学位請求論文について審査を行い、平成 24 年 12 月 20 日に、学力の口頭審査を公開で行なった結果、論文の内容、研究業績、研究に関する見識ともに優秀であり、かつ、今後の研究を進める能力も充分であることを確認した。博士(国際文化)の学位の授与は適当であると認められる。学位規程11条にもとづき、ここに報告する。</p> <p>なお、課程博士としての申請であり、外国語試験を免除した。</p> | | | |